



**Data**

監督・脚本：入江悠  
出演：大森南朋／鈴木浩介／桐谷健太／篠田麻里子／嶋田久作／吉村界人／間宮夕貴／岡村いずみ／菅田俊

## 👁️👁️ みどころ

「原作モノ」やTVドラマの延長のような「製作委員会方式」が氾濫する邦画界の中、入江悠監督がオリジナル企画で、オリジナル脚本を！

とある地方都市を舞台に、三人三様の少年時代の「原体験」を背負った三兄弟が主人公。最初の迫力ある事件と、それから30年後の対比はお見事だし、俳優たちの熱演は入江監督の演出にハマっている。

問題は、親父の土地を巡る相続処理。こうなれば本来は弁護士の出番だが、何故この物語にこんな遺言公正証書が登場してくるの？こりゃ脚本上の欠陥では・・・？また、そのために発生するヤクザを含む大抗争は一体ナニ・・・？三兄弟はもちろん、市会議員も、地元ヤクザもアホぼっかり・・・？

多くの評論家は本作を絶賛しているが、私はあえてそんな異論を・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■入江悠監督のオリジナルな企画と脚本に注目！■□■

本作は何よりも、入江悠監督のオリジナルな企画と脚本が注目されている。パンフレットにある「Special contribution」の中で入江監督は、「原作モノの映画とオリジナル企画の決定的な違いは、オリジナル企画は『もともと誰にも求められていない』という点だと思っています。原作モノは『これを映像化したものを見てみたい』と誰かが願って動き出すのが一般的だと思いますが、オリジナルの企画は誰にも求められていない。だけど、『私が見てみたいから作る』と解説したうえ、『Bizuran Te』の脚本もそう考えて、部屋に閉じこもりウンウン悩みながら書きました。まだ荒削りでしたが、実現してくれそうな可能性のある会社のプロデューサーに持ち込み、『面白いのでやりまし

よう』と書いていただきました」と述べている。

本作は新聞紙評でも好評。そして、そのすべてがこのオリジナル性に触れ、たとえば「自らの脚本で入魂の一作を撮った」と絶賛されている（山根貞男・映画評論家）。近時の邦画界は安易な人気小説（？）に頼った「原作モノ」が目立つだけに、私にはその事前宣伝だけで「こりゃ必見！」と思わせるに十分。

ちなみに、「ビジランテ」とは、聞き慣れない言葉だが、これは英語で言うと「Vigilante」＝「自警団」という意味らしい。さあ、入江監督によるそのオリジナルな企画と脚本の出来は？そして、演出は？

## ■□■三兄弟の悲惨な原体験は？■□■

冒頭、何の説明もないまま暗闇の川の中へ逃げる3人の子供たちと、それを追う父親・神藤武雄（菅田俊）の姿が登場する。その迫力は十分だが、はっきり言って、このシークエンだけでは父親が3人の息子たちの誰かから首を刺されて殺されそうになったこと、長男がリードしながら3人が逃げているのは、川の向こう岸の島に渡り、父親を刺したナイフを土の中に埋め込もうとしているためだということとはわからない。しかし、その行為によって、3人の子供たちが今の時代では到底許されない父親からのひどい暴力的折檻を受けたこと、そして長男の一郎が家を出て行く決心を固めたことが示される。

唸然としながら一郎を見送る二郎、三郎に対して、父親は「放っておけ！」の一言だけ。私も入江監督と同じ男の二人兄弟だった。そして、子供の頃に父親からひどい折檻を受けた時には、「この親父、殺したろうか！」と思ったこともあったし、「早くこの家を出ていきたい」と思っていたが、さて、神藤家を出て行った一郎のその後は？また、結局武雄の元で成長した二郎、三郎のその後は・・・？

『ディファイアンス』（08年）では、第2次世界大戦中の1941年、旧ソビエト連邦内ベラルーシを舞台として、ユダヤ人三兄弟が力を合わせてナチスドイツの東欧侵略に伴うユダヤ人狩りの中、命がけで戦う姿を感動的に描いていた（『シネマルーム22』109頁参照）。また、だんご三兄弟や亀田三兄弟の団結力は有名だが、さて、神藤家の三兄弟は・・・？

子供時代に受けた悲惨な原体験がずっと心に残るのは当然。当時最年長だった一郎がその傷を最も強く受けたのは当然だが、今彼はどこで何を？そして、一郎と同じ悲惨な原体験をした二郎と三郎の今は・・・？

## ■□■こんな二世議員は不要！これが地方都市の実態！■□■

都市問題をライフワークにしている私は、愛媛県松山市で高校時代までを過ごしただけに、地方都市のまちづくりのあり方に大きな興味を持っている。かつて、藩に分かれていた江戸時代は、それぞれの藩が独立していたが、明治維新後中央集権化される中、地方都

市は大きく変容した。同じ地方都市でも、埼玉、千葉、茨城などの東京都近隣の地方都市は首都との関連に悩みながら、それぞれ「おらが町」のあり方を模索してきた。

武雄が長年にわたって市会議員を務めてきたのは、埼玉県の田舎町らしい。冒頭の川のシーンからもわかる通り、この地方都市はまだ田園風景が広がっていたし、アウトレットモールの誘致建設計画が市議会の大きなテーマとなっており、反対する住民への説明会が開催されている状況を見ると、その時代は1990年代・・・？少なくとも、少子高齢化・人口減少の方向に社会構造が変化中、国土総合開発法から国土形成計画法へと方向性を切り替え、コンパクトシティが地方のまちづくりのキーワードになっている今の時代でないことは明かだ。他方、1980年代は、中曽根内閣の「アーバンルネサンス」の掛け声の下、各地で駅前再開発の嵐が吹き荒れたが、アウトレットモール建設はその時代のテーマとは少しずれている。しかし、アウトレットモール計画が立ち上がると、それに関連する土地の価格は？その土地を巡る関係者たちの思惑は？

あれから30年。長男の一郎は失踪したままだったが、今は次男の二郎（鈴木浩介）が武雄の後を継いで二世議員になっていた。アウトレットモール計画を牛耳っているのは、地元市議会最大会派の大泉源次郎（たかお鷹）と、その右腕のベテラン市会議員・岸公介（嶋田久作）の2人。武雄の葬儀を終えた二郎に対して岸は、アウトレットモール建設地に絡んでる武雄の相続地を早く二郎の名義にしろと命令。地元の暴力団・石部組が支配する風俗店で店長をしている三郎（桐谷健太）は、武雄の相続財産には何の興味も示していなかったから、二郎にとって岸からの命令の処理は簡単。当初、二郎はそう思っていたようだが・・・？

## ■□■相続処理をいかに？不動産の相続登記は困難！■□■

本作で武雄役を演じた菅田俊は私の大好きな個性派俳優で、冒頭のシーンでの存在感は本作のその後の展開への期待を大きく膨らませてくれる。それに対して、30年後の今、武雄の後を継いで市会議員にはなっているものの、妻の美希（篠田麻里子）と先輩の岸の両方からハッパをかけられっ放しのナマクラな二世議員（？）二郎の活動ぶりは情けない。また、二郎と同じく地元に残ってはいるものの、風俗店で女の子の管理をしている三郎もろくな若者ではなさそうだ。もっとも、埼玉県の片田舎レベルではこの程度の市会議員やこの程度の若者しか育たないのはやむを得ないかもしれないが、それでも武雄の相続の処理を終え、アウトレットモールが建設されれば、この田舎町も少しは進歩・・・？

他方、一郎が失踪している状態で、武雄の土地建物を含む相続財産の処理をどうするの？武雄が住んでいた家屋敷の広さは相当なものだから、その価格もそれなりのもの。今の日本では、いわゆる「所有者不明土地」が大きな社会問題になっているが、相続人の1人が所在不明の場合も、その相続処理が容易ではないのは常識だ。すなわち、相続処理（不動産の相続登記）のためには、相続人である3人の兄弟の遺産分割協議書（合意書）が必要

だから、一郎が行方不明の場合は、その調査が不可欠。どうしても発見できない場合は裁判を提起しなければならないが、その場合の手続きはかなり複雑、難解でかつ長期間を要することになる。二郎には顧問弁護士の飯田中（日野陽仁）がいるのに、何故彼は早くそれをきちんと説明しないの？いくら岸からの命令であっても、一郎が行方不明である以上、不動産の名義を二郎に移すのは極めて難しいことを早くきちんと説明しなければ、話がこじれてくるだけでは・・・？

## ■□なぜこんな公正証書が？こりゃ脚本上の不備では？■□

弁護士の私の心の中にそんな相続処理の不安が広がる中、スクリーン上では怪しげな雰囲気な男が相続地に入り、「立入り禁止」の看板を突き立てていたから、アレレ・・・？現地を見に行ったら二郎と三郎がアレレと思ったのは当然だが、よくよく見ると、この怪しげな男は一郎（大森南朋）らしい。いくら30年経っても、兄弟同士なら一目見ればその男が誰かわかりそうなものだが、本作では顔にある傷を確認してはじめて一郎だと気付くストーリーになっているから、アレレ・・・？

さらに、「立入り禁止」の看板を立てているのは何故かと聞くと、一郎は「この土地は俺が相続する」「公正証書もある」と言うからビックリ！公正証書とは武雄の遺言公正証書で、そこには「武雄が住んでいた本件土地建物は、一郎に相続させる」と書いてあるらしい。スマホのカメラに収めた公正証書の写真を二郎の顧問弁護士に見てもらおうと、はっきりそう言われ、これでは本件土地建物を二郎に相続登記するのは難しいと説明されたが、それに納得できないのは何よりも二郎のために懸命に働いてきた妻の美希らしい。さらに、一郎は堂々と、今は空き家（廃墟？）になっている家の中に若い女サオリ（間宮夕貴）と共に入り込み、堂々と住み込み始めたから、アレレ・・・。これでは相続争いの発生は必至だが、本件土地建物に固執する一郎の頑なな姿勢を見ると、その解決には時間がかかりそう。というよりも、公正証書がある以上、一郎の主張に正当性があるから、二郎が本件土地建物を相続するのは難しそう。そうなれば、二郎が岸の命令に従うことはできず、アウトレットモール計画も暗礁に乗り上げるから大変なことに・・・。

弁護士の私としては、それはそれですぐにわかるが、そもそも、何故本作にそんな公正証書が登場するの？あの父親が何故30年前に出て行った長男一郎に本件土地建物を相続させるという遺言公正証書を作っていたの？本作はこの公正証書を巡って三兄弟が争うのはもちろん、そこからアウトレットモール建設問題の可否、さらにはヤクザの抗争問題、そして、(大量)殺人事件へと展開していく物語だが、私にはそもそもこんな公正証書があること自体が不可解。こりゃ、明らかに脚本上の不備では・・・？

ちなみに、武雄が住んでいた家屋敷のある本件土地に一郎が固執する理由は、「あそこは戦争に行った祖父さんが満州から帰ってきて最初買った土地だ。鉄くず拾い集めた金で」というもの。しかし、父親にも家族にも、この町にもとことん絶望し、この町のことを考

えただけで、反吐が出そうなはずの一郎が、何故こんな気持ちを・・・？これも脚本上の不備では・・・？

## ■□■何故、こんなカッコつけのアホばかり？■□■

本件の脚本上の最大の疑問は、前述したように何故一郎への相続を明記した遺言公正証書があるのかということ。そして、一郎がそれを盾に本件土地建物の所有権を主張するのなら、一郎は何故弁護士を立ててまともな方法を取らないのかも、それに続く大きな疑問点だ。一郎は横浜に住んでおり、多額の借金を抱えたまま、今は生まれ故郷に逃げて来ているようだが、いずれ追っ手（ヤクザがらみの債権者）が押しかけてくるのは必至。すると、一郎はその借金返済のために本件土地を相続して売却するの？それならそれで合理的だが、本作を見ている限り一郎は何を考えてるのかサッパリわからないから、アレレ・・・？

二郎からの、本件土地を譲ってくれとの要求にも、三郎からの要求にも、一郎はただNOを貫くだけだ。また、岸の意向を受けた地元ヤクザ・石部組の大迫護（般若）が三郎を使って本件土地の放棄を迫っても、一郎はただただNOだけ。その結果、一郎に対して、大迫から左手甲に大ケガを負わされた三郎が相続放棄を迫る中、武雄のお屋敷には横浜からのヤクザと地元ヤクザが鉢合わせし大騒動に発展してしまうので、それに注目！いかにヤクザが脅しても、それにビビることなくNOを貫き、逆に「靴を脱げ」と切り返す一郎の姿はカッコいい。しかし、彼は飲んだくれていてだけで、何の格闘術を持っているわけでもないし、拳銃を隠し持っているわけでもないから、しょせんそれはカッコづけだけで、ヤクザの暴力の前には無力。ボロボロのかつて父親を刺したナイフで、いきなり後ろからヤクザの首筋を刺しても、その報復を受ければ負けてしまうのは明らかだ。

他方、地元のヤクザ・大迫も一郎に対して土地を放棄する念書を書けとすぐむばかりで、何の具体的な対案も用意していないから、こいつも凄みっぷりは認めるものの実はかなりのアホ。一瞬地元ヤクザと横浜のヤクザのトップ同士で協議が持たれ、ボス間交渉がまとまったかに見えたが、そこで一郎がオンボロナイフで地元ヤクザを刺してしまうと、たちまち一面は銃弾が飛び交う修羅場に。そして、それによって地元ヤクザは全滅し、一郎もあっけなく死んでしまうから、アレレ・・・？たかがアウトレットモール建設に絡む土地の相続処理だけでナイフや拳銃を使ったヤクザ同士の抗争事件となり、死者まで出したのでは全然割が合わないのは当然。そこをうまく闇から闇のうちに処理するのが知能派ヤクザの仕事なのでは・・・？

三郎だけは命からがら逃げ出したものの、さあこの後始末を如何に・・・？この武雄のお屋敷でのドタバタ劇（？）を見ている限り、一郎もアホだが、地元のヤクザも横浜のヤクザも、アホばかり！

## ■□■こりゃ外国人差別では？今ドキ自警団の存在意義は？■□■

大阪市生野区には、かつて「猪飼野（いかいの）」と呼ばれていた朝鮮人部落があったため今でも御幸（みゆき）通り商店街を中心とする「コレアタウン」が有名。そのおかげで大阪環状線の鶴橋駅桃谷駅の周辺は今でも韓国式焼肉の人気エリアだが、本作にはアウトレットモール建設予定地の近くにちよっと怪しげな（？）「中国人コミュニティ」が登場するので、そのありさまに注目！

他方、武雄が長年市議員をやっていたこの地方都市には、けやき防犯会と名乗る自警団があり、今は二郎がその代表だ。二郎のキャラでは、荒っぽい自警団活動をやっていくには役不足だと思っていると、案の定……。若手の団員・石原陸人（吉村界人）らが登場し、家の外に集まって夕食をとっている中国人コミュニティに対して抗議し、コミュニティへの介入を強めていくと、たちまちあれこれの衝突が。

中国の北京では、老朽家屋からの火災発生を契機として、現在一斉・大量の取り壊しと明け渡しが大きな社会問題になっているが、これは習近平への権力集中を強めている中国だからできること。外国人の人権も尊重する日本では、いかにこの中国人コミュニティが周辺に迷惑であっても、一斉立ち退きはとて無理。そう思っていたが、ある日、石原がパチンコのゴムで飛ばした石で失明したことをきっかけに、けやき防犯会と中国人コミュニティの全面抗争が激化し、放火事件にまで発展することに。

ホントに、この地方都市はハチャメチャ。一体誰がここをこんな町にしているの？今ドキ中国人コミュニティと市民との共存はどうあるべきなの？また、今ドキ自警団の存在意義は？

## ■キネマ旬報も絶賛！しかし、私はあえて欠陥の指摘を！■

キネマ旬報1月上旬新年特別号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、まず、普段厳しい意見を述べている北川れい子氏が珍しく星4つをつけ、「兄弟役3人の熱演も特筆もので、中でも桐谷健太に拍手を送りたい」と絶賛している。次に千浦僚氏も星3つながら、「今年のベストテンに入れたい。地元のヤクザをやった般若が最高だった」と褒めている。さらに、松崎健夫氏は星4つで、「グランドホテル形式」の構成を高く評価している。

たしかに私も、土地利権が絡み、外国人問題を抱えた「とある地方都市」を舞台とし、そんな町で生まれ、武雄のような父親の下で育てられた3人の男兄弟が、もがき苦しみながら生きていく姿をオリジナル脚本で描いた本作のチャレンジ精神は高く評価している。しかし前述したとおり、本作についてはストーリー形成の骨格となる遺言公正証書が何故登場してくるのかが何よりの脚本上の欠陥。また、それを前提にすれば、遺産分割を巡る訴訟か、それとも力づく・暴力づくで一郎に「放棄書」を書かせるか、のどちらしか解決方法がないことが最初から明らかであるにもかかわらず、三兄弟はもちろん市議員もヤクザもアホばかりだから、適切な処理がとれず、クライマックス（結末）のようなバカげた結果になってしまっている。もちろん、脚本としてはそれでも成立するが、少し利口

(マシな?) 人間が1人ぐらいでもいいのでは・・・? もっとも、そういう人物がいれば、本作の脚本は成り立たなくなってしまうから、さあそこらを入江監督はどのように考えるのだろうか? また、本作を絶賛している多くの映画評論家たちは、私が指摘するこんな脚本上の欠陥をどのように考えるのだろうか・・・?

2017 (平成29) 年12月22日記